『万葉集』「志貴親王挽歌」の「萩」の機能

廣川晶輝

一　はじめに

『万葉集』巻二の「挽歌」部には、「寧楽宮」の標目のもとに平城京遷都後の左の挽歌作品がある。(1)

　霊龜元年歳次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首并短歌

梓弓　手に取り持ちて　ますらをの　さつ矢手挾み　立ち向かふ　高円山に　春野焼く　野火と見るまで　燃ゆる火を　何かと問へば　玉桙の　道来る人の　泣く涙　小雨に降り　白たへの　衣ひづちて　立ち留まり　我に語らく　なにしかも　もとなとぶらふ　聞けば　音のみし泣かゆ　語れば　心そ痛き　天皇の　神の皇子の　出でましの　手火の光そ　ここだ照りたる（2・二三〇）

　短歌二首

高円の　野辺の秋萩　いたづらに　咲きか散るらむ　見る人なしに（二三一）

三笠山　野辺行く道は　こきだくも　繁り荒れたるか　久にあらなくに（二三二）

　右歌笠朝臣金村歌集出

　或本歌曰

高円の　野辺の秋萩　な散りそね　君が形見に　見つつ偲はむ（二三三）

三笠山　野辺ゆ行く道　こきだくも　荒れにけるかも　久にあらなくに（二三四）(2)

まず長歌を見よう。この挽歌作品の長歌に現れている特色について、清水克彦氏「笠金村論」(3)は、

　この歌における技法上の一つの大きな特色は、葬送を知らないたてまえの作者が、葬送者に問う形式を用いる事によって、親王葬送の悲しみが、作者ならぬ葬送者の言葉や動作として述べられ、すこぶる客観的な様相を呈しているという点である。

と述べる。また、『万葉集』巻十三の相聞歌や、巻二の柿本人麻呂の挽歌作品「泣血哀慟歌」の表現を「文学的伝統」と位置付けたうえで、それらの表現と比較し、

　もっとも大きな相違点は、相聞歌に見られた共通句や、人麻呂の挽歌における死の知らせの叙述において、問われる者、告げられる者であった作者が、金村作では問う者の位置に立っているという点である。

と述べて「金村の創造」を見出している。この作品の特色を明瞭に剔出していると言えよう。

それではこの作品の「短歌」の方はどうか。右に見るように、この長歌作品には「或本歌曰」とあり、短歌体の二首が並べ置かれている。この本文の「短歌」いわば「本文短歌」と「或本歌」について、〔作者〕〔間接的／直接的〕〔制作順〕という観点をめぐっての論考が複数あり、対立を見せている。伊藤博氏「第一人者の宿命」(4)は、

- 或本歌は金村の作ではない。
- 或本歌は直接的、本文短歌は間接的である。
- 或本歌を改作したのが本文短歌である。

ということがらを指摘する。これに対立するのが、小野寛氏「笠金村の歌集出歌と歌中出歌と或本歌」(5)である。小野氏論文は、

> すべて金村作である。本文短歌は直接的、或本歌は間接的である。本文短歌を改作したのが或本歌である。

ということがらを指摘する。このように両氏の論は真っ向から対立するわけだ。

伊藤氏論文・小野氏論文がまったく逆に「直接的」「間接的」の判断を下していることが明瞭に示すように、「直接的」「間接的」という対立軸は、ともすると印象批評の域にとどまってしまう危険性があろう。この対立について、村田右富実氏「志貴親王挽歌論―その文学史的位置―」(6)は、

> 或本歌と本文歌における直接・間接の違いを制作順に置換することは不可能だと考えている。

と述べている。その判断は適切であると思われる。本論としても同様に、「直接的」「間接的」を論じることで「本文短歌」と「或本歌」の制作順を論じることはできないと考える。

これまでの先行研究の展開を十分に重視したうえで、本論は、この長歌作品の理解において、「萩」が機能している様相を明らかにすることを目的としたい。結論を先取りすれば、「萩」の真正の美しさを理解できる資質を備える志貴親王の真正なる姿を描き出すことで、薨去された志貴親王の称揚につながる。この点で、皇子挽歌としての働きを十分に成しているということである。

二「萩」について

和歌史における「はぎ」の詠まれ方について、平田喜信氏・身﨑壽氏『和歌植物表現辞典』(7)は、

> ハギは日本全国いたるところの山野に自生し、秋をいろどる花として親しまれてきた。万葉集での用例は一四〇あまり、これは集中によまれた植物名としては最も多い。このような萩に対する好尚はやや例外的で、古今集以降も秋の歌に多くよまれていることはたしかだが万葉集ほどではない。

と述べている。『万葉集』の「はぎ」の表記は、仮名書例以外は「芽」「芽子」であるが、以下、便宜的に「萩」を用いることとしよう。『和歌植物表現辞典』の指摘にあるように、確かに、『万葉集』中の「萩」の用例は一四一例もある。「さくら」の用例が四〇例であるのと比較して、この数は多いと言える。そしてそこには、『和歌植物表現辞典』が述べているように、「萩に対する好尚」の存在を指摘できよう。その「萩」の詠まれ方・表象の概略を確認しておこう。

「秋の七草」として詠まれた例に、

> 山上臣憶良詠秋野花歌二首
>
> 秋の野に　咲きたる花を　指折り　かき数ふれば　七種の花　其一（8・一五三七、秋雑歌）
>
> 萩の花（芽之花）　尾花葛花　なでしこが花　をみなへし　また藤袴　朝顔が花　其二（8・一五三八、秋雑歌）

がある。また、「萩の花が妻・鹿が夫」という見立ての観念に基づいた歌として、

> 我が岡に　さ雄鹿来鳴く　初萩（先芽）の　花妻問ひに　来鳴くさ雄鹿（8・一五四一、秋雑歌、大伴旅人）

がある。また、「萩と露」の取り合わせの歌い方に基づいた歌として、

> 秋の野に　咲ける秋萩（秋芽子）　秋風に　なびける上に　秋の露置けり（8・一五九七、秋雑歌、大伴家持）

がある。さらに、「若い女性のたとえ」としての歌として、

> 春日野に　咲きたる萩（芽子）は　片枝は　いまだ含めり　言な絶えそね（7・一三六三、譬喩歌、寄レ花）

がある。

右の例示において、山上憶良、大伴旅人、大伴家持という奈良朝に活躍した歌人の歌を選んで提示したように、奈良朝における「萩に対する好尚」の存在を認めることができよう。このように「萩」は万葉人に好み愛され歌に詠まれた素材であったのだ。

三　「萩」の機能

(一)「見る」について

ここで、論の便宜上、もう一度、短歌および或本歌を掲げよう。

短歌二首

高円(たかまと)の　野辺(のへ)の秋萩(あきはぎ)　いたづらに　咲(さ)きか散(ち)るらむ　見る人なしに(二三一)
三笠山(みかさやま)　野辺行(ゆ)く道は　こきだくも　繁(しげ)り荒(あ)れたるか　久(ひさ)にあらなくに(二三二)

或本歌曰

高円の　野辺の秋萩　な散りそね　君が形見(かたみ)に　見つつ偲(しぬ)はむ(二三三)
三笠山　野辺ゆ行く道　こきだくも　荒れにけるかも　久にあらなくに(二三四)

本文短歌二三一番歌には、「見る人なしに」というように「見る」がある。また、或本歌二三三番歌にも、「見つつ偲はむ」というように「見る」がある。

周知の土橋寛氏「〝見る〟ことのタマフリ的意義(8)」の把握を見てみよう。

「国見」も天皇の儀礼となる前は、政治的区域ではない国土としてのクニを見る行事で、具体的にはゆらゆらと立昇る雲、煙、陽炎などを、クニの生命力の活動する姿と考え、それを「見る」ことが人間の生命力を盛んにするタマフリの行為と考えたのである。

土橋氏論文が説く「見る」行為の意義を、あらためて見出しておきたい。

(二)或本歌について

まず、「或本歌」二三三番歌を分析しよう。結句には「見つつ偲はむ」とある。この表現の『万葉集』中の用例を見てみよう。

当該歌のように意志の助動詞「む」の付いた「見つつ偲(しの・しぬ)はむ」の他に、その「む」が東国訛りの「も」となっている例、「む」と同様に意志の意味を帯びる終助詞「な」が付いた「見つつ偲はな」の例がある。ここまでが自らの「見る・偲ふ」行為の用例である。一方、他者の「見る・偲ふ」行為を述べる用例として「見つつ偲へ」の例、尊敬の助動詞「す」が付いた「見つつ偲はせ」の例、他者へあつらえ望む意味を帯びる終助詞「ね」が付いた「見つつ偲はね」の例がある。

これらをまとめて掲出する。なお、左の用例の掲出は注(1)にも述べているとおり新編日本古典文学全集版『萬葉集』に拠る。同書では「賞美」の意味が強い場合は「しのふ」と平仮名表記している。

イ　巨勢山の　つらつら椿　つらつらに　見つつ偲はな　巨勢の春野を(1・五四)
ロ　直に逢はば　逢ひかつましじ　石川に　雲立ち渡れ　見つつ偲はむ(2・二二五)
ハ　高円の　野辺の秋萩　な散りそね　君が形見に　見つつ偲はむ(2・二三三)
ニ　秋さらば　見つつ偲へと　妹が植ゑし　やどのなでしこ　咲きにけるかも(3・四六四)
ホ　我が形見　見つつ偲はせ　あらたまの　年の緒長く　我も思はむ(4・五八七)
ヘ　かはづ鳴く　清き川原を　今日見ては　いつか越え来て　見つつしのはむ(7・一一〇六)
ト　住吉の　岸に家もが　沖に辺に　寄する白波　見つつしのはむ(7・一一五〇)
チ　我妹子と　見つつ偲はむ　沖つ藻の　花咲きたらば　我に告げこそ(7・一二四八)
リ　池の辺の　小槻が下の　篠な刈りそね　それをだに　君が形見に　見つつ偲はむ(7・一二七六)
ヌ　朝づく日　向かひの山に　月立てり見ゆ　遠妻を　持ちたる人は　見つつ偲はむ(7・一二九四)
ル　我が業なる　早稲田の穂立　作りたる　縵そ見つつ　偲はせ我が背(8・一六二四)

ヲ　秋萩の　上に白露　置くごとに　見つつそ偲ふ　君が姿を（10・二二五九）

ワ　沫雪は　千重に降りしけ　恋しくの　日長き我は　見つつ偲はむ（10・二三三四）

カ　年の経ば　見つつ偲へと　妹が言ひし　衣の縫目　見れば悲しも（12・二九六七）

ヨ　我が面の　忘れむしだは　国溢り　嶺に立つ雲を　見つつ偲はせ（14・三五一五）

タ　対馬の嶺は　下雲あらなふ　可牟の嶺に　たなびく雲を　見つつ偲はも（14・三五一六）

レ　面形の　忘れむしだは　大野ろに　たなびく雲を　見つつ偲はむ（14・三五二〇）

ソ　我が背子し　けだし罷らば　白たへの　袖を振らさね　見つつ偲はむ（15・三七二五）

ツ　志賀の山　いたくな伐りそ　荒雄らが　よすかの山と　見つつ偲はむ（16・三八六二）

ネ　布勢の海の　沖つ白波　あり通ひ　いや年のはに　見つつしのはむ（17・三九九二）

ナ　……かくしこそ　いや年のはに　春花の　繁き盛りに　秋の葉の　もみたむ時に　あり通ひ　見つつしのはめ　この布勢の海を（19・四一八七）

ラ　八千種に　草木を植ゑて　時ごとに　咲かむ花をし　見つつしのはな（20・四三一四）

ム　我が妻も　絵に描き取らむ　暇もが　旅行く我は　見つつ偲はむ（20・四三二七）

ウ　我が面の　忘れもしだは　筑波嶺を　振り放け見つつ　妹は偲はね（20・四三六七）

ヰ　足柄の　八重山越えて　いましなば　誰をか君と　見つつ偲はむ（20・四四四〇）

ノ　あぢさゐの　八重咲くごとく　八つ代にを　いませ我が背子　見つつ偲はむ（20・四四四八）

オ　初雪は　千重に降りしけ　恋しくの　多かる我は　見つつ偲はむ（20・四四七五）

このように、『万葉集』中には当該歌を入れて二七例を数えることができる。このありようから、この「見つつ偲はむ」が慣用表現として存在していることがわかろう。

当該歌二三三番歌では、初句～第三句において「高円の　野辺の秋萩　な散りそね」とあり「高円の　野辺の秋萩」に「散るな」と呼び掛けている。そしてその理由が、第四句・結句で示される構成となっている。その理由が「君が形見に　見つつ偲はむ」であるわけだが、「形見」の内実については不明瞭である。当該歌と同様に「見つつ偲はむ」を持って「形見」が歌われている、

リ　池の辺の　小槻が下の　篠な刈りそね　それをだに　君が形見に　見つつ偲はむ（7・一二七六）

を参照してみよう。旋頭歌のこの一二七六番歌においては、前段の五・七・七で「池の辺の　小槻が下の　篠な刈りそね」とあり、「篠」を刈るなと歌われる。旋頭歌は、前段の五・七・七、後段の五・七・七が対称であるため、前段で謎かけをして後段でその種明かしをする構成も採り得る。この歌でもその構成が採られている。前段で投げかけておいた謎かけの理由が後段で示される。この歌は「君が形見」と歌っていることから、女性の立場の歌であることがわかる。後段の「だに」は「せめて～だけでも」の意味を表わす。この歌の叙述の主体〈われ〉は女性であり、この女性は、或る男性と篠を敷きなべて共寝をしたのだ。この女性は「君」と逢うことがままならない。ひょっとしたらこの恋愛はすでに終わってしまったかもしれない。「篠」は、逢うこと叶わない「君」の肌のぬくもりを想起できる唯一の形見として、二人のかけがえのない形見として歌の中で存在する。

これに比して、当該歌の「野辺の秋萩」は何故「君が形見」となり得ているのかは不明瞭である。生前賞美した対象だからなのか。「野辺の秋萩」が何をもって「君が形見」となり得ているのかが不明瞭と言わざるを得ない。この歌が詠まれた

「場」では共通観念としてあったのであろうが、記載されている当該歌だけからは解らない。慣用表現に依拠した歌として成り立っているが、右記の点は不明瞭であるのだ。

（三）本文短歌について

一方の本文短歌の方はどうか。まず、当該作品の長歌二三〇番歌の後ろに置かれている二三一・二三二番歌が、「反歌」ではなくて「短歌」となっている、そのことの意義について確認しておきたい。稲岡耕二氏「志貴親王挽歌の『短歌』について—金村の構成意識—」(9)は、

　長歌との関係において、時間的にも空間的にもそれに包括されるのでなく、それを越えて抒情するところに、人麻呂の「短歌」の特色があるが、金村の「短歌二首」も基本的にその流れを汲んでいると見られる。長歌には詠まれていない時点に視座を移し、薨去を知ったのちの哀悼のこころを、反歌として詠み加えるという意欲的な構成を見せたのであった。（引用文中の傍線、廣川。以下同じ）

と述べている。参照されるべき見解である。右の稲岡氏の見解は、稲岡耕二氏「人麻呂『反歌』『短歌』の論—人麻呂長歌制作年次攷序説—」(10)における分析に基づいている。「反歌」は「長歌」の要約や繰り返しの要素が強いと説かれるのが一般であるわけだが、柿本人麻呂は長歌に「短歌」を付けた。稲岡氏は、この柿本人麻呂の文学的営為に分け入るのである。その論考を見てみよう。稲岡氏は、

　それ以前の「反歌」の呼称が暗示していたものよりも、反歌相互間の連関も考慮され、長歌の枠を踏み出しうるような自由な反歌が生み出され、それに対して人麻呂は「反歌」の呼称を捨てて「短歌」という頭書を付したものと思われる。

と述べた。

この「反歌相互間の連関」が明瞭なのが、妻を亡くした夫の心情を綴る柿本人麻呂の作品「泣血哀慟歌」である。その第一群の長歌二〇七番歌の後の「短歌二首」を見てみよう。

　秋山の　黄葉を繁み　惑ひぬる　妹を求めむ　山道知らずも〈一に云ふ、「路知らずして」〉（2・二〇八）

　もみち葉の　散り行くなへに　玉梓の　使ひを見れば　逢ひし日思ほゆ（2・二〇九）

長歌二〇七番歌では日本上代において一般的であった結婚形態「通い婚」における夫婦が描かれる。人目を気にしているうちに頼りに思っていた妻が死んでしまった。妻の死に目に会えなかったわけである。また死後も弔いにも行けない。その夫の悲哀を歌うのが長歌二〇七番歌である。廣川晶輝『萬葉寫眞箇 No. 043（巻2・二〇八番歌）』(11)では、

　妻の死を人伝にしか知り得ない夫は、居ても立っても居られず、妻がよく出かけた軽の市に立つ。しかし、そこに妻の姿があろうはずもなく、夫は愛しい妻の名前を叫び、袖を振る。雑踏の中で愛しい人の名前を叫ぶこの情景は、現代の映画やテレビドラマの映像としても登場する。このように、第一群の中には、妻の死に目にも会えず、妻の所に行けずに取り残されている夫の姿がある。

と述べた。この長歌を受ける「短歌」の一首目の二〇八番歌では、妻の死を認めず、紅葉・黄葉が繁っているので妻は山に迷い込んだのだと歌う。一方「短歌」の二首目の二〇九番歌ではどうか。廣川晶輝『萬葉寫眞箇 No. 044（巻2・二〇九番歌）』(12)では、

　その次に置かれている当該歌では、その紅葉・黄葉の散ることが歌われるのであり、ここには、時の経過が内包されている。時の経過について、もう一点。「なへ（に）」は、「…と同時に」「ちょうどその時に」という意味の助詞であり、『萬葉集』中に二十五例ある。しかし、当該歌「散り行くなへに」のように、上の言葉に「行く」が付く例は他に一例も無い。「散り行く」とある当該歌では、〈時の経過〉という要素が一層強調されている。

　紅や黄に色付いていた周りの木々の葉も、季節の移ろいにはあらがえず、散り行く。非情にも時は流れ、移ろい行く。夫もそうした時の流れの中にいるのだが、妻を失った哀しみは消えることなく心の中に積み重なっている。周囲の時の流れから取り残される自分……、そんな新たな哀しみにも包まれ出した、まさにちょうどその時に、生前に妻との間を往き来した使いを見かけたのだ。

その瞬間、妻と仲睦まじく過ごしたあの交歓の日が思われ、次の瞬間、心の中に積み重なっていた哀しみが、どっと噴出する。

夫の救いようのない哀しみにかかわりなく、木々の葉はただ静かに散り行く。

と述べておいた。

この柿本人麻呂「泣血哀慟歌」第一群の短歌二首二〇八・二〇九番歌には、稲岡耕二氏「人麻呂『反歌』『短歌』の論―人麻呂長歌制作年次攷序説―」が説く「長歌の枠を踏み出しうるような自由な」要素が明瞭であり、「反歌相互間の連関も考慮」されている。そして、この様相は、稲岡耕二氏「志貴親王挽歌の『短歌』について―金村の構成意識―」が当該作品について、

時間的にも空間的にもそれ(長歌のこと。廣川注)に包括されるのでなく、……長歌には詠まれていない時点に視座を移し、薨去を知ったのちの哀悼のこころを、反歌として詠み加えるという意欲的な構成

を見出している見解の妥当性を保証しよう。

当該の本文短歌二三一番歌では、「高円の　野辺(のへ)の秋萩(あきはぎ)　いたづらに　咲(さ)きか散(ち)るらむ　見る人なしに」と歌われる。

まずは、「咲きか散るらむ」を分析しよう。「散るらむ」について、井上通泰氏『萬葉集新考　第一』[13]は、

チルラムといへるを思へば高円ノ野ならぬ他処にてよみしなり

と的確に述べている。「らむ」は現在推量の助動詞であり、目に見えない視界外において現在起こっていることがらの推量に用いられる助動詞である。名付けて「現在視界外推量」の助動詞である。当該短歌第一首は「高円の野辺ではない場所」から「高円の野辺」の様相を推量して「今、咲いては散り咲いては散っているだろう」と歌うのである。では、どのような様相が推量されているのか。

まずは、第三句「いたづらに」について確認しよう。辞書の記述ではあるが参照されるのが、大野晋氏・佐竹昭広氏・前田金五郎氏編『岩波　古語辞典　補訂版』[14]の記述である。同書では、「いたづら【徒ら】」の項目において、

当然の期待に反して、無為・無用で、何の役にも立たないことが原義

と説く。当該歌二三一番歌では、なぜ無為・無用、無駄に咲いては散るというのか。『岩波　古語辞典　補訂版』が言う「当然の期待に反して」という状況と合致する当該歌の状況が、「見る人なしに」であろう。『万葉集』中の「見る人なしに」の用例(助詞「を」が入ってのミ語法の用例も確実に拾っておいた)は、当該歌を入れて七例である。それを左に提示する。

イ)高円の　野辺の秋萩　いたづらに　咲きか散るらむ　見る人なしに(2・二三一)

ロ)風早の　浜の白波　いたづらに　ここに寄せ来る　見る人なしに〈一に云ふ「ここに寄せ来も」〉(9・一六七三)

ハ)去年咲きし　久木今咲く　いたづらに　地にか落ちむ　見る人なしに(10・一八六三)

ニ)阿保山の　桜の花は　今日もかも　散りまがふらむ　見る人なしに(10・一八六七)

ホ)上野　小野のたどりが　あはぢにも　背なは逢はなも　見る人なしに(14・三四〇五の或本歌)

ヘ)玉の浦の　沖つ白玉　拾へれど　またそ置きつる　見る人をなみ(15・三六二八)

ト)我がやどの　花橘は　いたづらに　散りか過ぐらむ　見る人なしに(15・三七七九)

全七例のうち四例において「いたづらに」が共起している。当該歌を飛ばして順番に見よう。巻九の一六七三番歌では「ここに寄せ来る」「浜の白波」という景勝を「見る人」がいないことが「いたづらに」と表現されている。巻十の一八六三番歌では、去年咲いた久木が今咲いている、その花を「見る人」がいないことが「いたづらに」と表現されている。巻十五の三七七九番歌は、越前国に配流された中臣宅守と都に残る狭野弟上娘子との一連の長大な贈答歌群の末尾に位置する「中臣朝臣宅守寄二花鳥一陳レ思作歌」の七首のうちの一首である。都の自分の邸宅の橘の花が散って花の盛りを過ぎてしまうことが、現在視界外推量の「らむ」によって推量されている。本来なら都の自邸で自分が見るべきなのに、自分が見られないことを「見る人なしに」と表現されている。「景勝の白波」「久木の花」「橘の花」はいずれ

も賞美すべき対象である。その賞美すべき人の不在が「見る人なしに」と歌われ、だから賞美すべき対象が「無為・無用、無駄」の状況に置かれていることが歌われているのである。このような歌い方を敷衍すれば、当該歌二三一番歌でも、「高円の　野辺の秋萩」という賞美すべき対象を「見る人」がいないことの「無為・無用、無駄」の状況が「いたづらに」と表現されていると言えよう。

先行研究としては、室町時代の連歌師・歌人であった宗祇の『萬葉抄』[15]が、

是も志貴王子死給て、高円山の萩はみはやす人なくて、徒にさき散らんとよめり。

と述べ、山田孝雄氏『萬葉集講義　巻第二』[16]は、「野辺の秋萩」の語釈において、

この萩は下の「二三二」の歌によれば、親王の愛したまひしものならむと思はる。

と述べ、「見る人なしに」の語釈において、

その見る人といふはそれを見て愛ではやす人といふ義なるが、裏に親王をさし奉れることいふまでもなし。

と述べていることが是非にも参照される。

ここでは、志貴親王自身の「見る」という行為が作品上で表出されるのだ。そして、本論では、すでに土橋寛氏の「〝見る〟ことのタマフリ的意義」を参照し、「それを『見る』ことが人間の生命力を盛んにするタマフリの行為」であることを確かめておいた。「見る人なしに」とは、萩の花の美しさの真価を評価し賞美し愛でることができた志貴親王、その人の、不在を表わすのである。志貴親王は生前、高円の野辺で萩を賞美し愛でたのである。

ところで、「野辺」を共通して持つ点で、短歌第一首と短歌第二首とは繋がっている。短歌第二首二三二番歌を見よう。

三笠山（みかさやま）　野辺行（ゆ）く道は　こきだくも　繁（しげ）り荒れたるか　久（ひさ）にあらなくに（二三二）

この「三笠山　野辺」の理解について、身崎壽氏「志貴親王挽歌の位置」[17]の見解を参照しよう。身崎氏論文では、「話者=作中主体」が「志貴の生前におもいをはせ」、「そのゆかりの土地」である『『高円』『三笠山』のなまえをよみこんで哀悼の意が表明され」ていると説く。「ゆかりの土地」として、短歌第一首二三一番歌において「高円の野辺」、短歌第二首二三二番歌において「三笠山野辺行く道」が示されるわけである。

また、第三句の「こきだくも」について、前掲の村田右富実氏「志貴親王挽歌論―その文学史的位置―」は、

「こきだくも」は、野辺の道を目の当たりにした感慨と解すべきである。……第二反歌の空間が三笠山に措定されているといって大過なかろう。

と述べる。近称の「こ」の的確な理解に基づく見解であり、賛同される。そして、ここで参照されるのが、

愛（は）しきかも　皇子（みこ）の尊（みこと）の　あり通（がよ）ひ　見（め）しし（之）活道（いくぢ）の　道は荒れにけり
（3・四七九、大伴家持「安積皇子挽歌」）

である。この歌では、生前「活道の道」を行き来しその様子を御覧になられた安積皇子がいらっしゃらない、ゆえに道は荒れてしまった、と歌われる。直接経験を表わす助動詞「き」が「見しし」とあることが歌の中で効いている。当該歌でも、生前「三笠山　野辺行く道」を行き来なさった志貴親王がいらっしゃらない、ゆえに、道は「繁り荒れ」てしまったと歌われるわけである。

この「繁り」の理解を深めよう。澤瀉久孝氏『萬葉集注釈　巻第二』[18]は当該歌二三二番歌の原文「繁荒有可」を「繁（しげ）り荒れたるか」と訓読すべきことに詳細な説明を付す。少々長くなるがその説明を引用しよう。

しげり荒れたるか――……「生ひざりし草生ひにけるかも」（一八一）、「木高く繁くなりにけるかも」（三・四五二）とある草木の繁くなる事である。道のあたりの雑草の繁くなる事が道の荒れる事になるわけである。草の繁くなつて荒れる事を「繁く荒れる」とは云はない。もし「しげく荒れる」といへば、その「しげく」は「ひどく」といふに近い。従つて「しげく」と「こきだくも」とは考の説のやうに重言と云つてよい。もし右に説明したやうな意味に「しげく」を用ゐるとすれば、「春草之（ハルクサノ）　茂生有（シゲクオヒタル）」（一・二九）、「夏草香（ナツクサカ）　繁成奴留（シゲクナリヌル）」（一・二九）とあるやうに「生ひて」とか「なりて」とかいふ言葉があつてこそ「荒れる」につゞくべきである。もしさういふ言葉を入れる事なしに「荒れる」に

つゞける為には、新考に「動詞と認めてシゲリ、シゲミなどよむべし。」とあるに従ふべきである。……集中「繁」と「茂」とは全く同様に用ゐられてゐる事、右にあげた数例を見ても明らかであり、そしてその一方の「茂」は「眞木葉哉（マキノハヤ）　茂有良武（シゲリタルラム）」（三・四三二）と動詞に用ゐた例もあるのだから、「繁」をまた動詞に用ゐる事も少しも不都合ではない。即ち今はシゲリと訓んで雑草などが生ひ繁つて、荒れた事よ、と解すべきである。

本論としても、澤瀉氏『萬葉集注釈』の説明に賛同し、「繁（しげ）り荒れたるか」と訓読する。

さて、ここで参照すべきは、大伴旅人の「亡妻挽歌」である。

帰るべく　時はなりけり　都にて　誰が手本をか　我が枕かむ（3・四三九）
都なる　荒れたる家に　ひとり寝ば　旅にまさりて　苦しかるべし（四四〇）
右二首臨二近向レ京之時一作歌

……

還二入故郷家一即作歌三首
人もなき　空しき家は　草枕　旅にまさりて　苦しかりけり（3・四五一）
妹として　二人作りし　**我が山斎は　木高く繁く　なりにけるかも**（四五二）
我妹子が　植ゑし梅の木　見るごとに　心むせつつ　涙し流る（四五三）

このように展開する大伴旅人「亡妻挽歌」歌群において、四四〇番歌の推量「苦しかるべし」が、四五一番歌では「苦しかりけり」というように気付きの「けり」を伴って現実のものとなっていると歌われている。この点で両首は対応している。「荒れたる家」の要素の一つに「人もなき空しき家」という要素があるのはもちろんであるが、別の重要な要素として「我が山斎は　小高く繁く　なりにけるかも」がある。

当該作品の短歌第一首と短歌第二首はともに「野辺」を詠むことで繋がっている。当該短歌第二首において「繁る」物を、前掲の澤瀉氏『萬葉集注釈』は「草木」「雑草など」と把握するが、以上述べて来た短歌二首の繋がりを考慮すれば、「草木」「雑草など」の具体的中身としては短歌第一首の「萩」が想定でき、「萩が繁る」という理解が導かれるのではなかろうか。「萩」は、志貴親王の生前は親王の〈見る〉行為に反応し、賞美に相応しく収まっており、「繁る」ことはない。しかし、親王の薨去後は自らの美しさを理解してくれる人の不在により繁り、道は荒れてしまう。親王の賞美に〈感応〉する萩の姿がここにあると言えよう。

ここで参照したいのが次の歌である。

島の宮　上の池なる　放ち鳥　荒びな行きそ　君いまさずとも（2・一七二、「舎人慟傷歌群」の一首）
鳥翔成　あり通ひつつ　見らめども　人こそ知らね　松は知るらむ（2・一四五、有間皇子関連歌群における山上憶良による追和歌）

一七二番歌からは、薨去なさってしまった日並皇子が生前、皇子の邸宅「島の宮」の「上の池」の「放ち鳥」を賞美していらっしゃり、「放ち鳥」も皇子生前の賞美に〈感応〉していたことがわかる。皇子亡き今、その賞美と感応の円環は失われてしまったのだ。一四五番歌においても、松を結んだ（一四一番歌）有間皇子の思いを松は知っているだろうと想像するのである。「松は」の取り立ての意味を表わす助詞「は」が効果的である。有間皇子の霊魂が「鳥翔成　あり通」い続けて松を御覧になっていることを、他の人間は解らないが、生前の有間皇子が手ずから結んで触れた「松は」知っているだろうと歌う。植物松の〈感応〉の理解が基盤にあることは動かない。

四　まとめ

当該の長歌作品「志貴親王挽歌」では、野辺で萩を賞美する志貴親王の像が作品内で造形される。長歌冒頭部分の表現「梓弓（あづさゆみ）　手に取り持ちて　ますらをの　さつ矢手挟み（たばさみ）　立ち向かふ」は、「的（まと）」と同じ訓を持つ由縁で「高円山（たかまとやま）」に掛かる序詞であると説かれることが一般であるが、「高円」が志貴親王の「ゆかりの土地」であることを考え合わせれば、この序詞の表現も無意味に存在するとは思われない。この序詞の表現も、志貴親王にお仕えする「ますらを」たちの颯爽とした姿を描くことで、志貴親王の生前の生き生きとした姿の造形と見事に繋がろう。そして、「萩」の真正な美しさを賞美する親王の賞美の心に対しての〈萩の感応〉を描くこ

とは、萩の美しさを的確に賞美し得た親王の真正な様を称揚することに繋がる。このように、「皇子挽歌」における表現のあり方、「萩」の機能を理解したい。なお、生前の草花への真正な賞美を歌うこの万葉第三期の表現は、万葉第四期における大伴家持「弟書持挽歌」（17・三九五七～三九五九）において弟書持の生前を描く叙述「萩の花　にほへるやど」に向けての家持の自注「言斯人為レ性好二愛花草花樹一而多植二於寝院之庭一故謂二之花薫庭一也」の表現効果へと射程を伸ばすと考えられよう。

注

（1）閲覧可能な写本は複製本を参照し閲覧不可能な写本は『校本萬葉集』を用い、本文校訂を施した。当該歌および他の『万葉集』の歌の書き下しは、小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏、新編日本古典文学全集版『萬葉集』（小学館）に拠り、適宜私に改めた箇所もある。

（2）当該作品の題詞の記述は「霊龜元年歳次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首并短歌」であるが、『続日本紀』には「霊亀二年八月」条の記述として、「甲寅（十一日）、二品志貴親王薨。遣二従四位下六人部王、正五位下県犬養宿禰筑紫一、監二護喪事一。親王、天智天皇第七之皇子也。宝亀元年、追尊、称二御春日宮天皇一。」と記されており、違いを見せている。上記『続日本紀』の引用は、新日本古典文学大系版『続日本紀』（岩波書店）に拠り、日にちを（　）の中に補って示した。この薨去の年月の違いに関連して、近藤章氏「志貴親王薨去とその挽歌」（『国語と国文学』五一―八、一九七四年八月）、村山出氏「志貴親王の挽歌―成立と背景―」（『奈良前期万葉歌人の研究』、一九九三年三月、翰林書房。初出、「志貴親王挽歌論―その成立と背景をめぐって―」、一九八〇年一一月）等の論考は、薨時がいつなのかを含めて詳細な分析を試みる。しかし、梶川信行氏「志貴親王の薨去とその挽歌」（『万葉史の論 笠金村』、一九八七年一〇月、桜楓社。初出「志貴親王挽歌論序説―親王薨去時と挽歌制作時と―」、一九八〇年三月）が諸説一つ一つを対象としそれぞれの「問題点」を列挙し「まだまだ多くの問題点を残しており、その結着は今後の研究にまたなければならない部分が多い。」と述べているとおり、薨時の決定は困難をきわめよう。本論としては、この問題には分け入らず、当該作品の表現の「機能」の分析に努める。

（3）清水克彦氏「笠金村論」（『萬葉論集 第二』、一九八〇年五月、桜楓社。初出、一九七二年二月）

（4）伊藤博氏「第一人者の宿命」（『萬葉集の歌人と作品 下 古代和歌史研究4』、一九七五年七月、塙書房。初出、一九七〇年一二月）

（5）小野寛氏「笠金村の歌集出歌と歌中出歌と或本歌」（『論集上代文学 第六冊』、一九七六年三月、笠間書院）

（6）村田右富実氏「志貴親王挽歌論―その文学史的位置―」（『女子大文学 国文篇』五六、二〇〇五年三月）

（7）平田喜信氏・身﨑壽氏『和歌植物表現辞典』（一九九四年七月、東京堂出版）

（8）土橋寛氏「〝見る〟ことのタマフリ的意義」（『萬葉集の文学と歴史 土橋寛論文集 上』、一九八八年六月、塙書房。初出、一九六一年五月）

（9）稲岡耕二氏「志貴親王挽歌の『短歌』について―金村の構成意識―」（『萬葉集研究 第十四集』、一九八六年八月、塙書房）

（10）稲岡耕二「人麻呂『反歌』『短歌』の論―人麻呂長歌制作年次攷序説―」（『萬葉集研究 第二集』、一九七三年四月、塙書房）

（11）廣川晶輝『萬葉寫眞簡 No. 043（巻2・二〇八番歌）』（二〇一二年、大阪府立大学）

（12）廣川晶輝『萬葉寫眞簡 No. 044（巻2・二〇九番歌）』（二〇一二年、大阪府立大学）

（13）井上通泰氏『萬葉集新考 第一』（一九二八年三月、国民図書）

（14）大野晋氏・佐竹昭広氏・前田金五郎氏編『岩波 古語辞典 補訂版』（一九九〇年二月、岩波書店）

（15）宗祇『萬葉抄』の引用は、『萬葉集叢書第十輯 萬葉学叢刊 中世編』（一九二八年二月、古今書院）に拠る。

（16）山田孝雄氏『萬葉集講義 巻第二』（一九三二年七月、宝文館）

（17）身﨑壽氏「志貴親王挽歌の位置」（『宮廷挽歌の世界―古代王権と万葉和歌―』、一九九四年九月、塙書房）

（18）澤瀉久孝氏『萬葉集注釈 巻第二』（一九五八年四月、中央公論社）

〔付記〕本稿は、平成二十九年度美夫君志会九月例会（二〇一七年九月一〇日、於 中京大学）における口頭発表「はぎを愛でる―「志貴親王挽歌」の「萩」の機能への理解―」を基にしている。